

しん なか なが くぼ
山元町 新中永窪遺跡 現地説明会資料

平成26年6月15日(日) 13:30～ 宮城県教育委員会

【調査要項】

遺跡名：新中永窪遺跡

所在地：亶理郡山元町坂元字新中永窪

調査原因：常磐線復旧工事

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査協力：東日本旅客鉄道株式会社

山元町教育委員会

調査期間：平成25年12月3日～3月14日

平成26年4月7日～7月予定

調査面積：2,900㎡

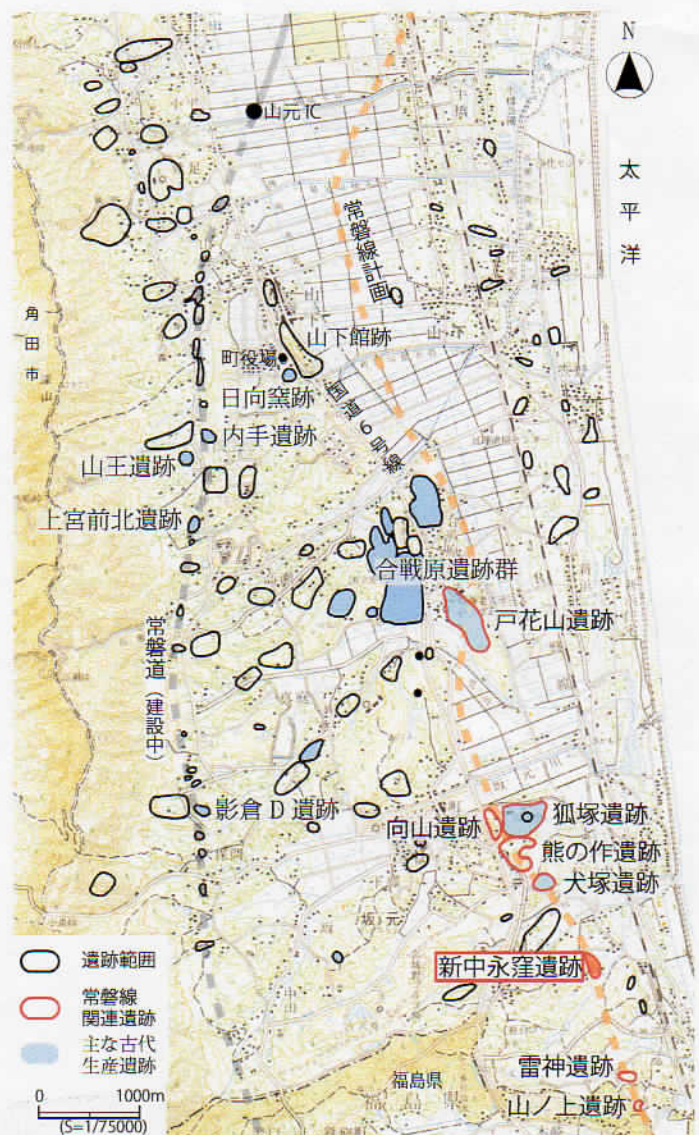


写真1 新中永窪遺跡C区全景(南から)

はじめに

山元町では、東日本大震災により不通となっている常磐線じょうばんせんの復旧工事が進められています。町南部の坂元地区には、計画路線内に戸花山遺跡など8遺跡が確認されており、縄文時代～中世の遺構・遺物が見つかっています。宮城県教育委員会では工事に先立って平成25年4月から、これらの遺跡の発掘調査を実施しており、これまでに7遺跡の調査についてほぼ終了しました。発掘調査の実施にあたっては、震災からの復興事業として早期の調査終了を目指し、他県市職員の応援を得て、調査体制を強化し対応しています。

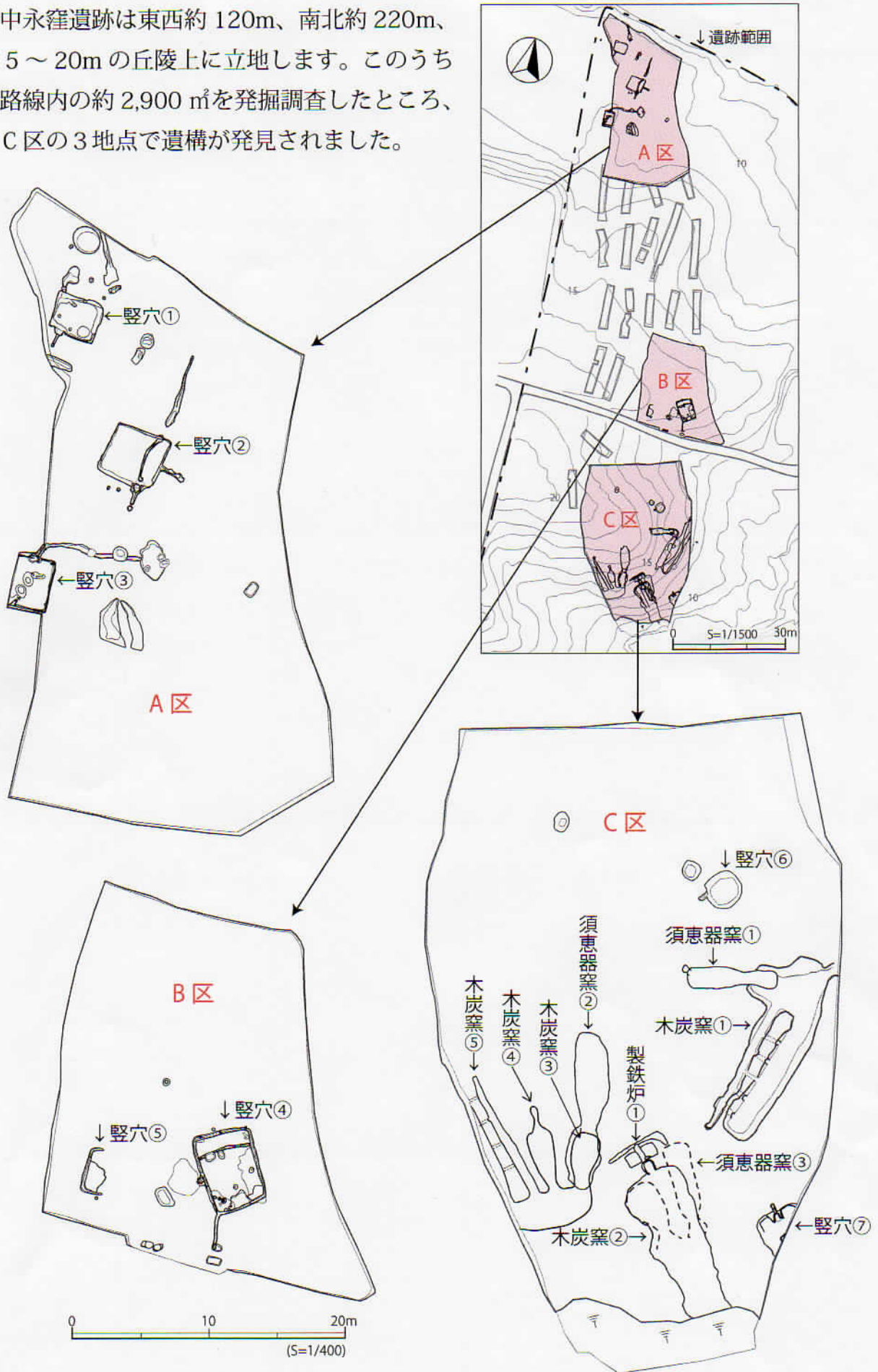
新中永窪遺跡は、奈良時代～平安時代初期(8世紀～9世紀初頭)の集落遺跡・生産遺跡で、たてあなじゅうきよ 竪穴住居7軒、せいてつろ 製鉄炉1基、須恵器や木炭を焼いた窯8基などが見つかりました。遺物は、土師器、須恵器、鉄製品、鉄滓、羽口などが出土しています。



第1図 常磐線と山元町の遺跡分布

検出された遺構

新中永窪遺跡は東西約 120m、南北約 220m、
 標高 5 ~ 20m の丘陵上に立地します。このうち
 計画路線内の約 2,900 m²を発掘調査したところ、
 A ~ C 区の 3 地点で遺構が発見されました。



第 2 図 調査区と遺構の配置

竪穴住居

一辺3～5mの四角形に地面を掘り下げて床とした住居で、壁際には炊事用のカマドがありました。竪穴①～④は、排水用とみられる溝が竪穴の外に延びています（写真2）。竪穴⑥は直径約2.5mの円形に近い小型の竪穴で、カマドの煙道から須恵器の坏10点が重なって横倒しに出土しました（写真4）。カマドの使用を終える際の儀礼として埋められたと考えられます。



写真2 竪穴住居②(南から)



写真3 竪穴②カマド
(北から)



写真4 竪穴⑥カマド煙道
(北東から)

すえきこうぼう かじ 【須恵器工房と鍛冶工房】

竪穴④の床からは、須恵器の材料となる多量の粘土が出土しました（写真6）。また、粘土の詰まった細い穴があり（写真5）、ロクロを回すための軸木が据えられていたと考えられます。その近くから出土した土器には「得足(とこたり)」という文字が刻まれており（写真7）、工人の名前と推測されます。同じ竪穴から鍛冶用の炉も見つかっているため（写真8）、鉄を加工する鍛冶工房も兼ねていたと考えられます。なお、竪穴⑦も鍛冶工房です。



写真5 竪穴④全景(南東から)



写真6 竪穴④粘土出土状況(南東から)



写真7 竪穴④刻書土器



写真8 竪穴④鍛冶炉



第3図 須恵器作りと鍛冶のイメージ

須恵器窯

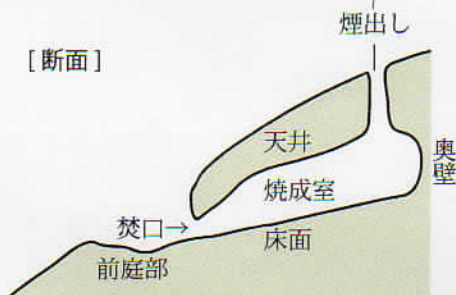
ほじき

奈良～平安時代には、土師器と須恵器とよばれる2種類の土器が多く使われていました。須恵器は窯の中で高温で焼かれるため、硬質で灰色になるのが特徴です。今回見つかった3基の須恵器窯は、いずれも斜面をトンネル状に掘り込んで登り窯のように作られています。窯の中には、焼いている途中に割れてしまった須恵器の破片が多数散らばっており(写真10)、8世紀中頃～後半の須恵器窯と推定されます。

[平面]



[断面]



第4図 窯の構造



写真9 須恵器窯①(北東から)



写真10 須恵器窯②出土状況(南から)

木炭窯

主に製鉄の燃料となる木炭を生産した窯と考えられます。木炭窯②～④は須恵器窯と似たような形です。一方、木炭窯①と⑤は、トンネル状に掘った焼成室の側面に「横口」と呼ばれる作業用の穴が開けられていました(写真12)。横口付木炭窯は西日本に多く分布するもので、宮城県内では利府町硯沢窯跡、山元町内手遺跡で見つかっています。



写真11 木炭窯③出土状況(南東から)



写真12 木炭窯①(北東から)
長さ約10mの焼成室に約1.5m
間隔で5個の横口がありました



第5図 横口付木炭窯推定復元図
「硯沢窯跡発掘調査現地説明会資料」
(利府町教育委員会2008)より一部改変

→
第6図
炭窯跡が発掘されるまで



製鉄炉

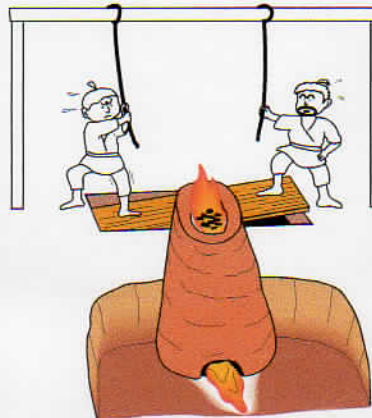
製鉄炉①は、「^{たてがたる} 豎形炉」とよばれる^{えんとう} 円筒形の炉で、海岸でとれる砂鉄と、窯で生産した木炭を使用していました。踏み鞆^{ふいご}で起こした風を土製の通風管^{つうふうかん}で炉の中に送り込み、炉内を高温にして砂鉄を溶かしました。製鉄炉は繰り返し使われたと考えられ、炉の下方には大量の鉄滓^{てっさい}（不純物のかたまり）が堆積しており（写真13）、その量は約2トンになりました。



写真13 製鉄炉①(南西から)



写真14 製鉄炉①(南から)



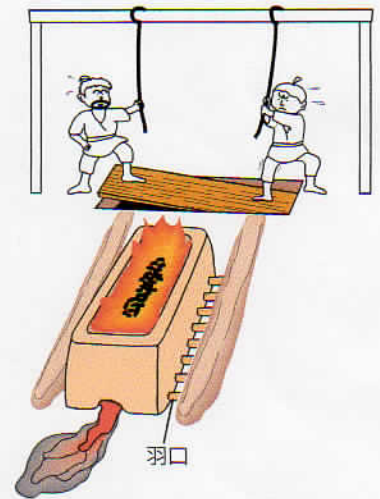
第7図 豎形炉のイメージ



写真15 豎形炉による製鉄実験(福島市にて)

【山元町の製鉄炉】

山元町では震災後の発掘で古代の製鉄炉が複数調査されています。上宮前北遺跡^{かみみやまえきた}で見つかった9世紀頃の製鉄炉2基は、バスタブのような形の「箱形炉」^{はこがたる}で、踏み鞆と多数の羽口^{はぐち}を用いて風を送っていました（写真17、第8図）。一方、犬塚遺跡^{いぬづか}で見つかった2基の箱形炉は、踏み鞆も羽口も見られないため、送風の仕組みは分かっていません。両端に大型の穴が掘られているのが特徴で、8世紀前半頃と推定されています（写真16）。このように、さまざまな形の炉がありますが、変遷や生産された鉄の特徴の解明は今後の課題です。



第8図 箱形炉のイメージ



写真16 犬塚遺跡の製鉄炉



写真17 上宮前北遺跡の製鉄炉

まとめ

新中永窪遺跡では、製鉄炉や木炭窯、須恵器窯など古代の生産遺構が多数見つかりました。これらは密集し、重複して作られているため（写真 18・19）、8世紀～9世紀初頭の間には須恵器や鉄の生産が盛んに行われていたことがうかがえます。また、「豎形炉」と呼ばれる製鉄炉や「横口付木炭窯」は、県内でも調査例の少ない構造のもので、良好な状態で発見されました。そして、これらの生産に携わった人々の住居や工房が隣接して見つかっており、古代の生産遺跡の様子を知る上でも大変貴重な発見となりました。

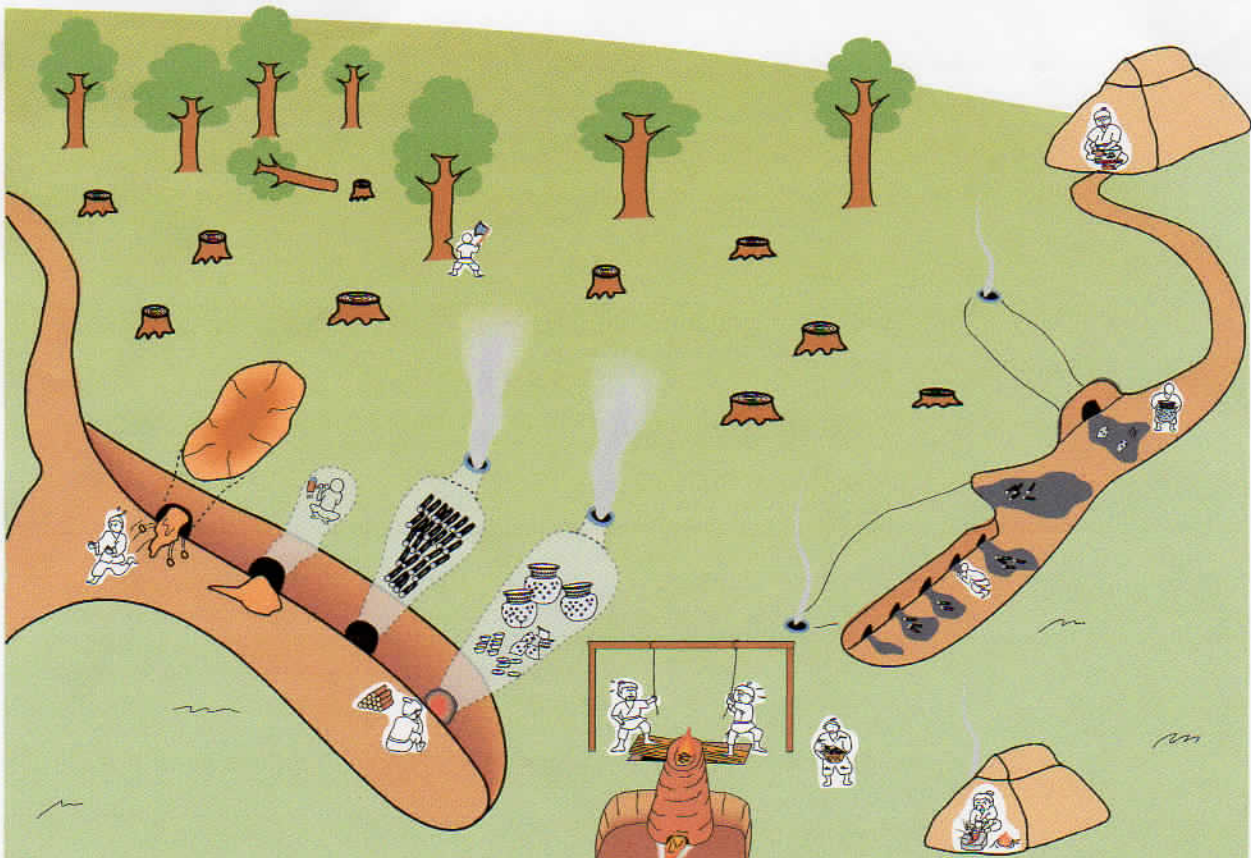
山元町の南に隣接する福島県相馬地方では、南相馬市横大道遺跡（国史跡）など大規模な古代の生産遺跡が見つかっています。新中永窪遺跡をはじめとする山元町よこだいどうの生産遺跡もそれらと密接な関わりがあったと考えられます。



写真 18 製鉄炉①より古い木炭窯②と須恵器窯③（南から）



写真 19 3基並んだ木炭窯③④⑤（南から）



第9図 8世紀後半の新中永窪ムラのように（調査成果をもとにアレンジしています）